

木更津市水深遺跡

— 岩根待機宿舎埋蔵文化財調査報告書 —

平成10年12月

千葉県警察本部
財団法人 千葉県文化財センター

き さ ら つ み ず ぶ か
木更津市水深遺跡

— 岩根待機宿舍埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第347集として、千葉県の千葉県警察岩根待機宿舍建設に伴って実施した木更津市水深遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、竪穴住居跡や方形周溝墓が発見され、弥生土器や石器が出土するなど、この地域の弥生時代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年12月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県警察本部による岩根待機宿泊舎新築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県木更津市岩根2-2155-9に所在する水深遺跡(遺跡コード206-014)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県警察本部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理事業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、南部調査事務所木更津調査室長 小林清隆が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県警察本部、木更津市教育委員会、財団法人君津都市文化財センター、永沼律朗、大谷弘幸の諸機関及び諸氏の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1:50,000地形図 木更津
 - 第2図 第4図 木更津市発行地形図 1:2,500図8を改図転載
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯	1
2	調査方法と成果の概要	3
3	基準層序	3
第2節	周辺の環境	4
第2章	検出した遺構と遺物	
第1節	遺構と出土遺物	7
第2節	遺構外出土遺物	27
第3章	まとめ	33
報告書抄録		巻末

挿図目次

第1図	遺跡の位置(1:50,000)	1	第15図	0 1 4	18
第2図	調査区とその周辺	3	第16図	0 0 8・0 1 1・0 1 2出土遺物	19
第3図	基準層序	4	第17図	0 1 3～0 1 8出土遺物	20
第4図	周辺の遺跡	5	第18図	0 2 0・0 4 0・0 4 2	21
第5図	検出遺構配置図	6	第19図	0 2 0・0 4 0・0 4 2出土遺物	22
第6図	0 0 3	7	第20図	0 2 1	23
第7図	0 0 3・0 0 1 B・0 0 6出土遺物	9	第21図	0 2 1出土遺物	24
第8図	土坑(1)	10	第22図	0 2 2・0 2 3出土遺物	25
第9図	土坑出土遺物	11	第23図	0 2 5・0 2 8出土遺物	26
第10図	土坑(2)	12	第24図	0 2 9～0 3 2・0 3 5・0 4 1 出土遺物	28
第11図	0 0 1・0 0 4・0 0 5出土遺物	14	第25図	遺構外出土遺物(1)	29
第12図	0 0 5・0 0 5 B・0 0 7出土遺物	16	第26図	遺構外出土遺物(2)	30
第13図	0 0 7	17	第27図	方形周溝墓の分布	34
第14図	0 1 1・0 1 2	17			

表 目 次

第1表 実測図掲載土器一覧	31
---------------	----

図 版 目 次

図版1	1.調査前の遺跡近景	図版4	1.021全景
	2.平成8年度調査状況		2.021遺物出土状況(1)
	3.平成9年度調査状況		3.022全景
図版2	1.003全景	図版5	1.021遺物出土状況(2)
	2.003遺物出土状況		2.021遺物出土状況(3)
	3.002遺物出土状況		3.022遺物出土状況
	4.024遺物出土状況		4.022土層断面
	5.026全景		5.023遺物出土状況
	6.027全景		6.025全景
	7.034全景		7.025遺物出土状況
	8.036全景		8.029全景
図版3	1.005B遺物出土状況	図版6	出土土器(1)
	2.011・012全景	図版7	出土土器(2)
	3.012遺物出土状況	図版8	出土土器(3)
	4.014全景	図版9	出土土器(4)
	5.014遺物出土状況		土製品・ガラス製小玉
	6.020・040・041全景	図版10	石器・石製品
	7.020土層断面		
	8.040遺物出土状況		

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯

千葉県警察本部は、木更津市岩根に警察官の待機宿舍の建設を計画した。この事業に当たって、千葉県警察本部は、千葉県教育委員会に対し、事業予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を出した。これに対して千葉県教育委員会から、事業地内に遺跡が所在する旨の回答が出された。その後、遺跡の取扱いについて、千葉県教育委員会と千葉県警察本部との間で協議が重ねられ、その結果、発掘による記録保存の措置を講ずることで協議が整った。調査は財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、千葉県との委託契約を締結し、発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成8年度と平成9年度に実施した。平成8年度は、調査対象となる2,086㎡に対し、その10%に当たる208㎡の確認調査を行い、その結果に基づいて、1,700㎡の範囲について本調査を実施することになった。本調査は、平成9年1月20日から2月27日の間に1,200㎡を、そして平成9年4月9日から5月30日に500㎡について実施した。なお、各年度の担当者と作業内容は次のとおりである。

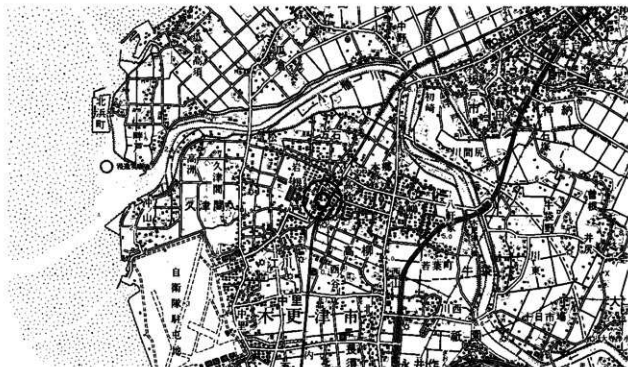
平成8年度(確認・本調査)

期 間 平成9年1月4日～平成9年2月27日

調査部長 西山太郎 南部調査事務所長 高田 博

担 当 技師 沖松信隆

作業内容 確認調査 上層208㎡/2,086㎡ 上層本調査1,200㎡



第1図 遺跡の位置 (1:50,000)

平成9年度(本調査、整理の一部)

期 間 平成9年4月1日～平成9年6月30日

調査部長 西山太郎 南部調査事務所長 高田 博

担 当 室長 小林清隆

作業内容 上層本調査500㎡、出土遺物の水洗・注記から実測の一部

平成10年度(整理、報告書刊行)

期 間 平成10年4月1日～平成10年6月30日

調査部長 沼澤 豊 南部調査事務所長 高田 博

担 当 室長 小林清隆

作業内容 実測、挿図・図版作成、原稿執筆、報告書刊行

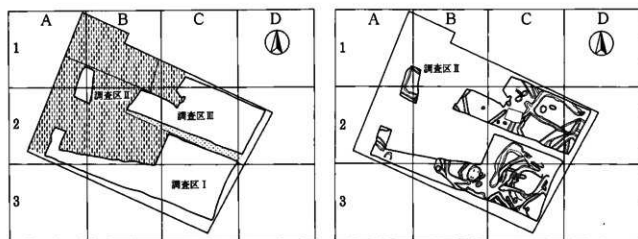
2 調査方法と成果の概要

平成8年度に実施した確認調査は、調査対象区の長辺と並行する形で7本のトレンチを設定し、遺構検出面まで掘り下げ、表土下の状況把握に努めた。その結果、既存の建造物などの影響で、攪乱を受けた範囲が認められるものの、土坑や溝状の遺構がかなり密集して存在することが明らかになった。また、調査対象区の北西隅は、全面にわたって攪乱されていることが判明し、その範囲を除外した1,700㎡が本調査の対象となった。

本調査は、建設工事の都合から、調査対象区の南半分の1,200㎡を先行して行うことになり、重機により表土除去を行った。現表土上面から遺構検出が可能になる面までは55cm前後で達し、そこからは人力による清掃を行った。遺構検出面は砂層で、遺構検出中に表面に水が浮き出る状況が見られたため、調査区の周囲に排水用の溝を掘ることとした。溝を掘ると直ぐに水が湧き出してきたため、水中ポンプによる排水作業を開始した。結局、以来調査中に排水溝から水が引くことは一時もなく、調査期間内をとおして24時間排水を行うことになる。この状況は平成9年度も同様であった。

表土除去後、本調査区全体に公共座標に基づいて、20m×20mの方眼を被せて大グリッドにし、北から南に1・2・3、西から東にA・B・C・Dの記号を付けた。さらに大グリッドの中を2m×2mの小グリッド100個に分割し、北西隅から00・01・・・と付し、南東隅を99にした。地区名は、大グリッド、もしくは大グリッドと小グリッドを組合せることで表示できるようにした。

確認調査の結果から、既存の建物の影響による攪乱部の存在は判明していたが、表土を除去したところ、さらに攪乱を受けている部分が認められ、遺構プランの確認に苦慮するところとなった。平成8年度本調査範囲の中でも2C区には広範囲に攪乱や確認面の削平が認められ、精査可能な遺構が限られてしまうことが明らかになってきた。また、平成9年度調査範囲の中の、2D-00周辺にも攪乱の存在が認められた。さらに平成9年度の調査時には、平成8年度に本調査を完了した地区に建物工事が開始されており、安全確保等の面から、平成9年度調査区と工事区(平成8年度本調査区)の間の一部が調査不可能になった。したがって、実際に遺構の精査が可能な範囲が3か所に分断された形となった。本書では、それぞれを南から、調査区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼ぶことにしたい(第2図下段左図)。この呼称は整理段階で新たに付けたものであるが、遺構番号は調査時の番号をそのまま踏襲する。



平成8年度本調査範囲
 平成9年度本調査範囲
 擾乱

第2図 調査区とその周辺

本調査範囲に擾乱部が予想以上に広がっていたことと、存在していた遺構が主に溝状遺構であったために、単年度の調査区内では、平面的に遺構の全体を捉えることが難しい状況になった。溝は途中で分岐するか、あるいは交差する形で検出されるので、それぞれに遺構番号を付けて調査を行うことにし、最終的には001から041までの遺構番号を用いた(019は欠番)。

検出遺構の中で堅穴住居跡と判断したのは1軒である。また、底面を平坦に作っているが、堅穴住居跡と断定する根拠に乏しい堅穴状の遺構が2基存在し、いずれも弥生時代後期に比定できる。

溝として調査を行い、その後の検討により周溝と考えるに至った溝が8条あり、弥生時代後期の5基の方形周溝墓の存在を想定した。ただ、この方形周溝墓と前記の堅穴状遺構の2基については、調査範囲に

一部が検出されたにとどまったので、調査可能範囲からの推測に基づいている。

土坑は9基検出した。遺物が少ない遺構もあるが、いずれも弥生時代後期の所産になると考えられる。

これまでに挙げた遺構以外が溝である。数え方には問題があるかもしれないが、25条の溝を検出している。時期は弥生時代後期と古墳時代後期に比定できるが、圧倒的に弥生時代の溝が多い。

遺物の主体は土器類になる。わずかに晩期に比定できる縄文土器が出土しているが、大部分が弥生土器で占められている。また、少量の土師器や須恵器も出土している。土器以外では軽石の出土が目立ち、使用痕が残るものや、勾玉が存在する。ほかに土製品、石器、ガラス玉が出土している。

3 基準層序

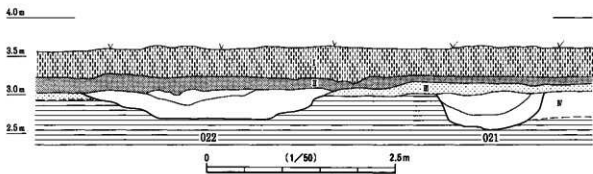
調査前に構築物が存在していたため、調査区内を横断する形で土層断面図を作成することはできなかった。第3図は、ベルト状に残った調査区Ⅰと調査区Ⅲの間で作成している。

Ⅰ層は表土擾乱層である。擾乱や構築物撤去に伴う整地層で、本来の層厚がどの程度かは明らかにならない。現状では40cm前後の厚さがある。

Ⅱ層は黒灰色の砂を主とする層である。砂に混じる鉄分が酸化し、赤茶色になった粒を含んでいる。この層にも遺物が含まれるが、本層で遺構を検出することはできない。層厚は15cm～20cmである。

Ⅲ層は黒味が強い砂主体の層である。古墳時代の遺構がこの層を切って構築される。層厚は15cm前後である。

N層は暗黄色の砂層である。弥生時代の遺構が本層を切って構築されている。なお、遺構確認は結果的にN層の上面で実施している。また、N層を掘り下げると湧水が認められる。



第3図 基準層序

第2節 周辺の環境

今回発掘調査を実施した水深遺跡は、木更津市岩根2-2,155-9に所在する。この地点は、JR内房線の岩根駅から、線路に沿って木更津方面に400m南下した西側である。この周辺は小櫃川の左下流左岸に含まれ、現在の小櫃川まで1.2km、海岸線までは2.7kmの地点に立地する。第1図と第4図から分かるように、JR内房線から西側の遺跡周辺は住宅が建て込み、病院、自衛隊施設等も存在する。そのためか、土地条件図では人工地形の盛土地として色分けされている¹⁾。一方、JR内房線から東側地域は自然堤防に区分されている。この自然堤防は、国道16号の旧道に沿って連なるように形成され、特に小櫃川南岸の高柳地域ではやや広範な広がりが見られる。発掘成果から考えると、地形的には水深遺跡周辺も、高柳地域と同じ自然堤防に属すると見ることが可能となろう。



第4図 周辺の遺跡

小櫃川は房総丘陵の清澄山系に源を発し、木更津市金田で東京湾へと注ぐ河川である。中流域から下流域には、肥沃な沖積平野が形成されている。また、その沖積平野を望む兩岸の台地には、旧石器時代から中世に至る各時代の遺跡が存在する。さらに沖積地内の所々に自然堤防が認められ、そこにも人々の生活の痕跡を留めている。近年小櫃川中流域の発掘が相次ぎ、その成果の一部も公表されつつある²⁾。それに対し、下流域における発掘調査例は少なく、水深遺跡周辺では高砂遺跡の調査が知られているにすぎない。高砂遺跡は、岩根駅の南東側の自然堤防上に展開する遺跡で、これまで2地点の調査が実施されている。その1か所は平成7年に調査が行われ、弥生時代中期の宮ノ台式土器を伴う竪穴住居跡1軒や、古墳時代中期の円墳の周溝が検出されている³⁾。もう1か所はJR内房線寄りの地点で、平成9年に確認調査が行われ、弥生時代後期の竪穴住居跡、方形周溝墓、土坑、溝の存在が明らかにされている⁴⁾。いずれにしても、今後の調査成果の蓄積が待たれる地域といえる。

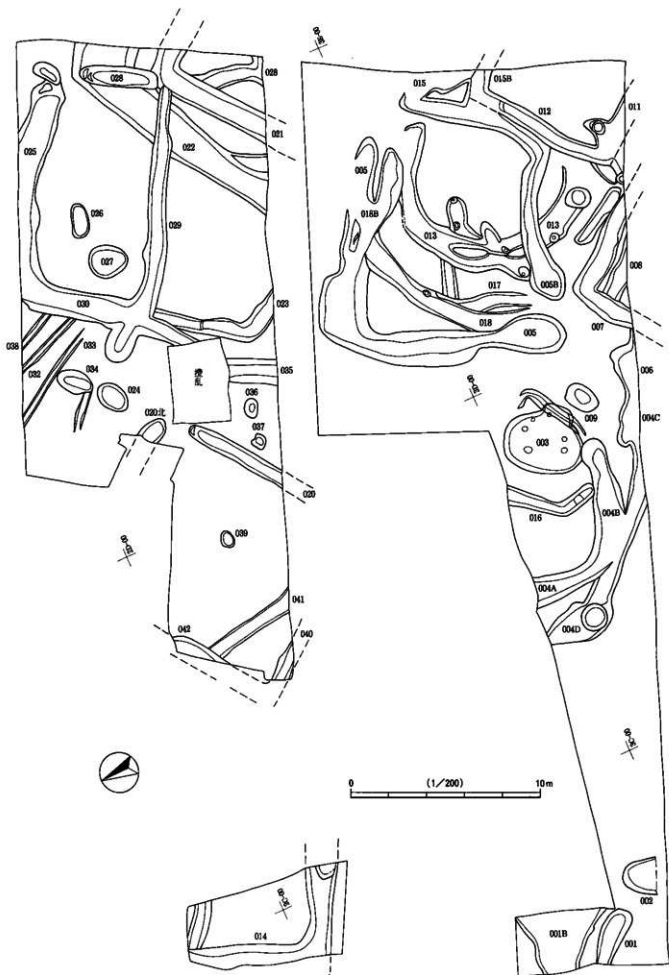
注1 国土地理院発行の1:25,000土地条件図「木更津」に基づく。

2 (財)千葉県文化財センター 1998 『袖ヶ浦市荒久(2)遺跡』

(財)千葉県文化財センター 1998 『一般国道409号(木更津「区」埋蔵文化財調査報告書)』

3 (財)君津郡市文化財センター 1996 『高砂遺跡』

4 (財)君津郡市文化財センターの御教示による。



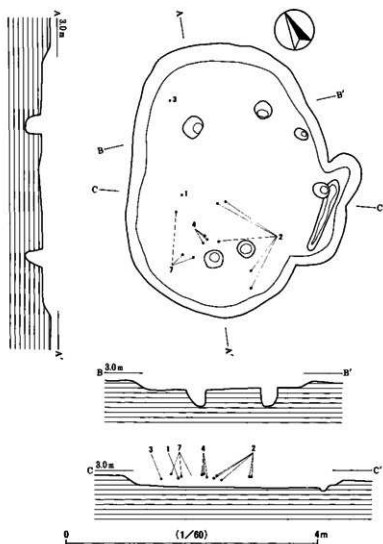
第5圖 検出遺構配置圖

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 遺構と出土遺物

前章で述べたように、調査によって検出した遺構には、竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑、方形周溝墓、溝が存在する。これらの遺構の多くは切り合った状況で検出された。さらに調査区内にその一部のみが明らかになり、調査区外に伸びる遺構も少なくない。そこで個々の遺構をそれぞれに取り上げていくと、位置関係だけでも煩雑になるので、第5図をもって竪穴状遺構及び溝の遺構平面図に替えることにしたい。また、本文での遺構の概要の説明は、竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑の順で進め、次に方形周溝墓と溝を遺構番号順で行っていくことにしたい。

なお、遺構番号は現場において調査順に付し、001から041まで使用したが、001にはBを、004にはA・B・C・Dの、そして005・015・018にBの枝番を用いた。また、019は遺構として認められないので、調査期間中に欠番扱いとした。



第6図 003

003(遺構:第6図 図版2 遺物:第7図 図版6)

3C-18を中心にした位置に検出された遺構である。平面形は長径4.20m、短径3.10mの楕円形であるが、東側に張り出し部が存在する。検出面から床面までの深さは12cm~18cmを測るにすぎない。砂層中に床面が設定され、平坦であるが硬質面は認められない。床面にピットが不規則に6か所存在するが、配置状況から考えると、いずれも柱穴の可能性は低いといえる。また、炉の検出にも努めたが、その存在は確認できなかった。張り出し部については、住居に本来伴う施設というよりも、住居廃絶後に壁が崩れて、外に広がったとも考えられる。柱穴の確定が困難であったり、炉が未検出であるが、検出面でプランが明確に捉えられたことや、比較的まとまって遺物が出土したことから、堅穴住居と判断した。

遺物は遺構全体に散るような状況で出土している。保存状態の良好なものは少ないが、住居の南西部に多く分布している。第7図に示したように、壺(1~4)、鉢(5)、甕(6・7)がある。2の壺は頸部以下が遺存し、胴部は中位からやや下がった位置が大きく影らんでいる。全面に赤彩が施され、その他の装飾は加えられていない。6は口唇部に押圧が加えられ、頸部に輪積み装飾が行われている甕である。7は台付甕である。甕部の底に1.2cm×0.8cmの焼成前に穿たれた孔が認められるが、他の台付甕には認められず、何を目的にした穴なのか不明である。

001B(遺構:第5図参照 遺物:第7図)

調査区Iの西隅に当たる2B-66付近において、炭化物や焼土の広がりが見えられ、そこを精査した結果、掘込みが認められ、遺構の存在が判明した。しかし、周辺は擾乱が著しく、遺構の中央部に水道管の埋設があるため、明確なプランの把握が困難であった。調査時点では堅穴状遺構として扱ったが、遺構の種類の断定は難しい状況にある。検出面からの深さは30cm前後を測り、床面は比較的平坦に設定されている。床面にピット等の施設の痕跡は存在しない。遺構全体から土器片が散在して出土しているが、保存状態の良好な資料は含まれていない。第7図は出土した遺物の一部で、壺や無頸壺が認められる。

006(遺構:第5図参照 遺物:第7図)

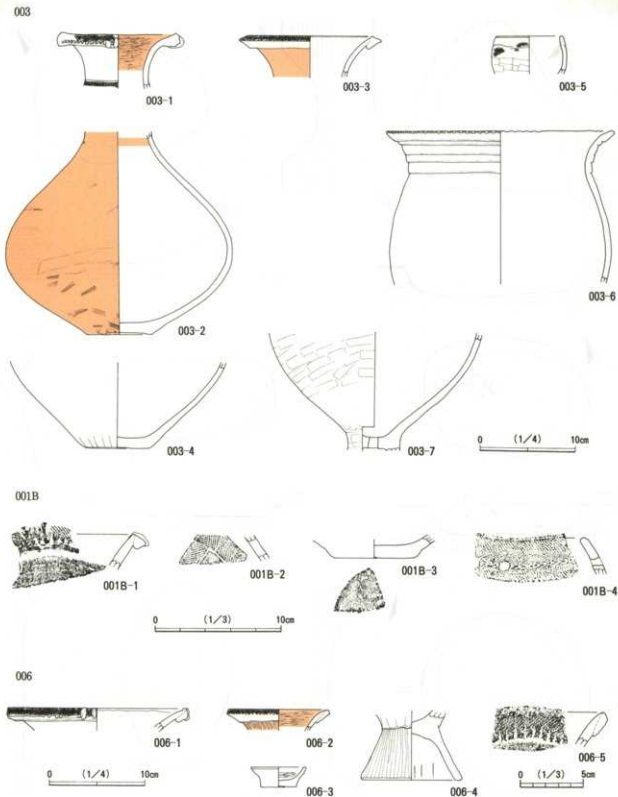
3C-49を中心に出された。南側が調査範囲の外に含まれ、004C・004Aとも連続しているため、明確な形態や規模を捉えることが困難である。調査時では、北東隅が遺構のコーナー部と考えられたので、堅穴状遺構になるのではないかと判断した。検出面から床面までの深さは30cm前後を測る。遺物は散在して出土している。第7図に示したように、壺や台付甕が認められるが、いずれも保存状態は不良である。

002(遺構:第8図 図版2 遺物:第9図)

2B-97を中心にして位置している。遺構の南西側が調査区外に含まれるため、形態や規模は明らかにならない。土坑の半分として調査を行ったが、溝状遺構の端部の可能性もある。土坑とした場合、長径は明らかでなく、現状で短径は1.93mになる。深さは30cmを測り、底面は平坦である。遺物の出土量はわずかで、第9図に示した弥生土器の壺等が、破片で出土したにとどまる。002-1は肩部に縄文が施され、ヘラによる鋸歯状の沈線文が加えられるが、磨り消しは行っていない。

009(遺構:第5図参照)

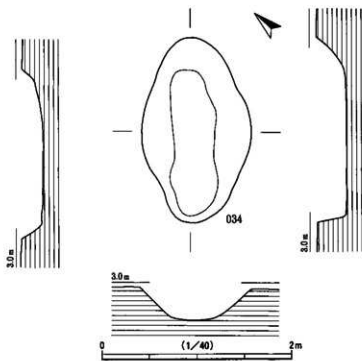
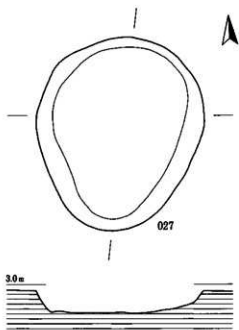
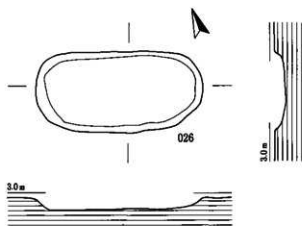
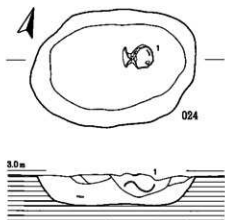
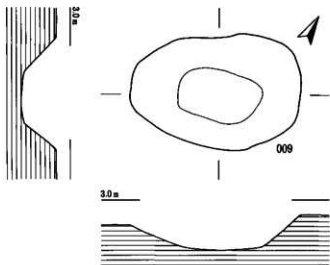
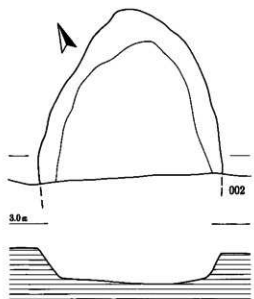
調査区Iの主として3C-28に位置し、北西側に堅穴住居とした003が所在するが、重複する遺構は存在せず、単独で検出された土坑である。平面形は楕円形で、長径1.80m、短径1.20m、深さ38cmを測る。弥生土器の小破片が出土している。



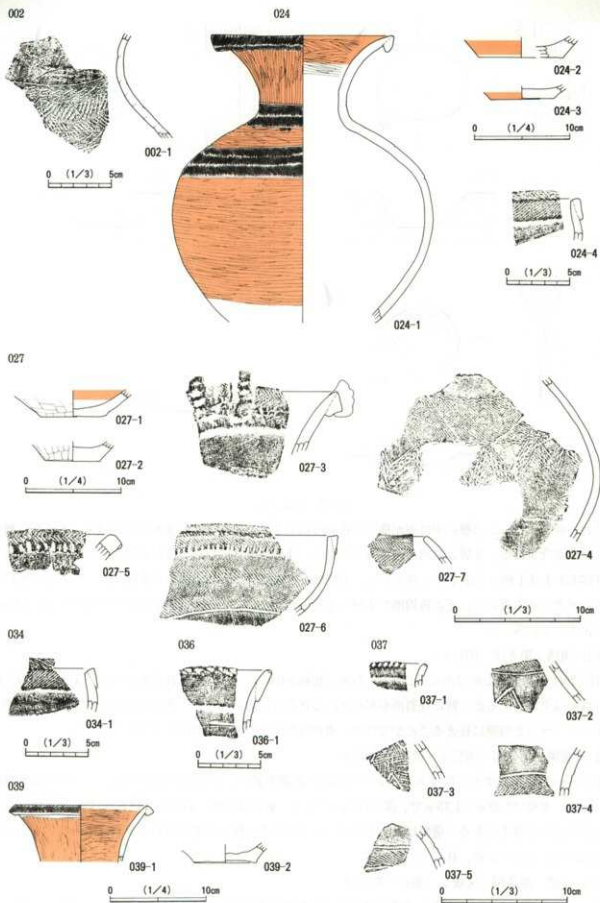
第7図 003・001B・006出土遺物

024(遺構：第8図 図版2 遺物：第9図 図版6)

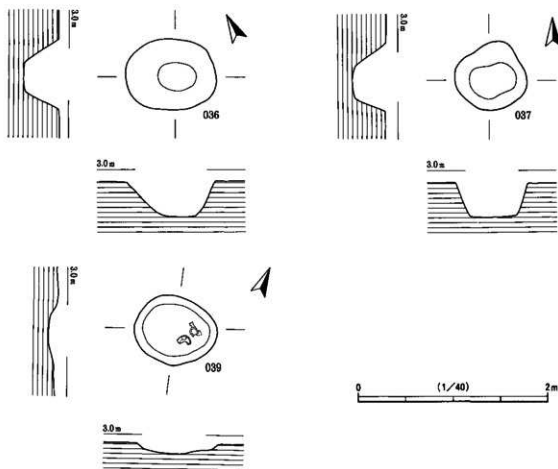
調査区Ⅲの2D-14付近において検出された、長径1.75m、短径1.20mの楕円形の土坑である。底面は中央が周囲よりやや高まっているが、ほぼ平坦といってよいであろう。覆土は4層に分けられる。1層は真っ



第8图 土坑(1)



第9圖 土坑出土遺物



第10図 土坑(2)

黒に近い砂質土で、この層の中に壺が横位の状態で出土している。2層は黒褐色の砂質土に赤茶色に酸化した鉄分が含まれる。3層は暗褐色の砂質土である。4層は酸化した鉄分と砂が混ざる暗黄色土である。第9図024-1は1層から出土した壺である。土層断面を観察すると、4層から2層によって土坑が埋まり、中央の凹部に壺を置いて、その後周囲に1層を充填したように見える。ほかには弥生土器の底部、鉢の破片が出土している。

026(遺構：第8図 図版2)

2D-28に位置する土坑である。長軸長1.77m、短軸長0.85mの長楕円形の形態を示す。深さは14cmと浅く、底面は平坦であるが、特に硬質面が形成される状況は認められない。覆土は黒色砂質土の単一層で、検出面でプランを明瞭に捉えることができた。遺物は弥生土器の細片が出土したにとどまる。

027(遺構：第8図 図版2 遺物：第9図)

主に2D-27に位置する土坑である。東側に0.8mの距離を置いて土坑026が所在する。形態は不整円形を呈し、規模は2.02m×1.75mで、深さは23cmである。底面は平坦であるが、硬質面は存在しない。覆土は黒褐色の砂質土である。遺物は弥生土器が出土している。保存状態の良い資料は出土していないが、第9図に示したように壺、鉢が認められる。

034(遺構：第8図 図版2 遺物：第9図)

2D-04に位置する土坑である。南西に隣接して土坑024が存在する。長軸長1.90m、短軸長1.15mの長楕円形の平面形を示し、深さは33cmを測る。底面は1.50m×0.45mになり、硬質面は形成されていない。

が平坦である。遺物は弥生土器がわずかに出土している。

036(遺構:第10図 図版2 遺物:第9図)

2C-42に位置する土坑である。平面形は楕円形を呈し、規模は0.95m×0.75mで、深さは38cmである。底面は0.4m×0.3mで、断面形は逆台形になる。遺物は弥生土器が少量出土している。

037(遺構:第10図 遺物:第9図)

2C-41に位置する土坑である。1m東に土坑036が存在する。形態は不整形を呈し、規模は0.75m×0.72m、深さは35cmである。底面は平坦で楕円形になる。遺物は弥生土器がわずかに出土している。

039(遺構:第10図 遺物:第9図 図版6)

2C-29に位置する土坑である。平面形は楕円形に近く、規模は長径0.87m×短径0.70mである。底面は中央がやや低くなり、検出面から12cmを測る。第9図に示した弥生土器の壺の口縁部と底部が出土している。

001(遺物:第11図)

2B区に検出された溝状遺構である。北側に001B、南東側に002が位置し、西側は調査区外に伸びている。当初001Bの一部と考えて調査を行っていたが、覆土層を除去した段階で別遺構であることが判明した。調査部分は溝の端部と考えられるが、全体の形態や規模は明らかにならない。深さは30cm前後である。第11図1の壺を除いては、出土遺物の保存状態は不良である。

004A・B・C・D(遺物:第11図 図版10)

3C区に検出された溝状遺構である。004Aに接続する3条の溝が認められるものの、Aの北側は攪乱され、南側が調査区外に伸びるため、個々の形状や規模は明らかではない。また、それぞれの時間的前後関係も判然としないが、Aの北側からBで1条、DからAの南側からCで1条である可能性が高い。仮にそのように見ても、定型的な遺構にはならず、溝として捉えるにとどまる。遺物は壺、鉢、甕、ミニチュア(第11図004B-2)の土器類のほか、使用痕の認められる軽石(004B-10)、叩き石状の礫石器(004B-11)が存在する。

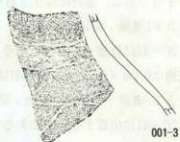
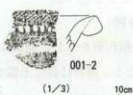
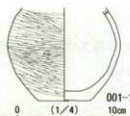
005・005B(遺物:第11・12図 図版6・10)

005は2D-73で南東に伸びる溝と、南西に伸びる溝が接続してコーナーを形成する。一方005Bは、3D-45で北西に伸びる溝が屈曲し北東に向きを変化させている。この2条の溝は接続する部分が存在せず、両者が鉤の手状に対向して位置するが、全体として不整な四角形を呈するように巡っている。調査時点では、この平面形から方形周溝墓の可能性が高いと判断した。しかし、溝の上端が明瞭でない部分が多く、断面形も開いたU字形を呈するなど、方形周溝墓とは断定しかねる点が多々見受けられる。ここでは可能性を残しつつも溝状遺構に含めておきたい。

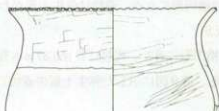
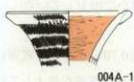
005の幅は場所によって変化が認められ、最も狭まる地点では0.8m、最大で2.5mを測る。深さは20cmで、溝底に段や土坑は存在しない。遺物は壺、鉢が認められるが、保存状態はいずれも不良である。また、石器(第12図005-20)が出土している。

005Bは前者と比較すると掘り方がしっかりしており、深さも90cm前後を測る部分も認められ、断面形は逆台形を呈している。遺物の出土は多くないが、弥生土器の壺2点(第12図005B-1・2)のように保存状態が良好なものが存在する。なお、完形に近い1は覆土中から横倒しの状態で出土したものである。第12図005B-6は不明土製品である。

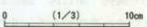
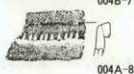
001



004A · B · C



004B-6



004B-10

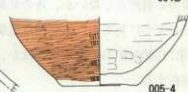
005



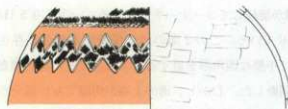
005-1



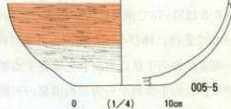
005-2



005-4



005-3



005-5



005-6



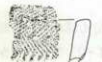
005-7



005-8



005-9



005-10



005-11



005-12

第11图 001 · 004 · 005出土遺物

007(遺構:第13図 遺物:第12図 図版6)

3D区の調査区南側に位置している。3D-31において、直角に曲がるコーナー部のプランが捉えられ、そこから南東方向と南西方向に伸びる溝の存在が明らかになった。溝の幅は1.0m~1.2mで、深さは20cm~25cmである。断面形態は逆台形で、底面は平坦な状態になっている。コーナー部が鋭く直角に折れ、溝幅が比較的一定して、掘り方がはっきりしていることなどから、方形周溝墓の一部になると判断した。全体の規模の推測は不可能であるが、発掘部分から推定し、方台部の一辺の規模が6m以上になるのは明らかである。遺物はコーナーから南西に伸びる溝で多く出土しているが、保存状態はいずれも不良である。器種では壺が多く含まれ、鉢や甕も認められる。

008(遺物:第16図 図版6・10)

方形周溝墓の一部と考えられる007の内側、3D-41付近で検出した溝状遺構である。南東から北西に伸びて007と接して止まっている。007側から南東方向に向かい、15cm~25cmと深さを増していく。遺物は壺、甕のほか石製品が出土している。第16図008-6は軽石製の勾玉である。尾部を欠損するものの整った勾玉と断定できるが、その材質が軽石というのは、きわめて希な例になるだろう。現存長53mm、幅28mm、厚さ24mm、重量6.44gである。

010

007の北東側に位置する長さ3.65mの溝である。幅は0.65m前後で、深さは20cmを測る。長楕円形の土坑の可能性もあるが、いずれにしても遺構の性格は判然としない。弥生土器の破片がわずかに出土している。細片であり、図示するまでに至らない。

011・012(遺構:第14図 図版3 遺物:第16図 図版7・10)

調査区全体の南東隅に位置し、011~012と連続する溝である。011は3D-64付近から南東に伸びて、調査区外に続いていく。その間に土坑状の掘込みが近接して、上端が不明瞭となる部分がある。012は011と接続して北東に伸び、3D-36から南東方向に90°向きを変化させて調査区外に伸びている。掘り方はしっかりしており、深さは25cm前後で、断面形は逆台形を示している。北東端と南西端の両端で直角に近い角度で曲がり、掘り方も明瞭であることから、方形周溝墓の一部と考えられ、011と012は同一遺構として捉えることができる。そのように判断すると、北東-南西方向の方台部の規模は7m内外になる。遺物は比較的多く出土している。土器類では壺、高杯、鉢、甕が認められ、ほかには軽石製品が存在する。遺物は012の南西部から011にかけて集中する状況が認められ、第16図012-1の壺もその範囲から出土している。第16図011-6は敲打痕と擦痕が残る礫石器である。第16図012-5は軽石製品で、2面に鮮明な擦痕が認められる。

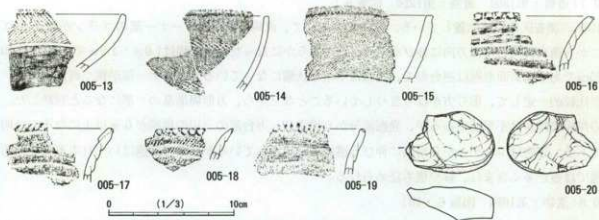
013

主に005・005Bの内側に、弧を描くように検出された溝である。プランが不明瞭で、端部も明確に捉えられないので、周溝になる可能性がきわめて低い遺構である。本遺構の周辺には017・018の溝が検出されているが、いずれもその性格を断定できる根拠を見いだすのは困難といわざるをえない。遺物は弥生土器が出土しているが点数は少なく、保存状態の良い資料は認められない。

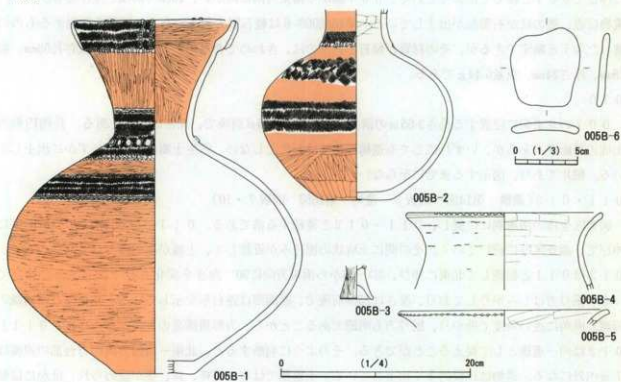
014(遺構:第15図 図版3 遺物:第17図 図版7)

調査区Ⅱの2B-08付近で直角に向きを変える溝状遺構である。しかし、周辺が攪乱されており、一部分の検出にとどまっている。調査が可能な範囲が狭く、別の溝も接続しているが、本跡は方形周溝墓にな

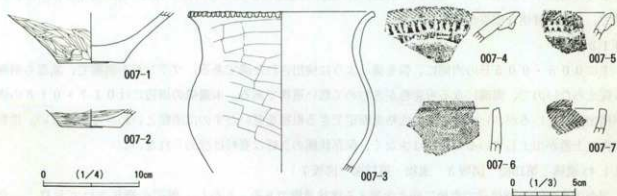
005



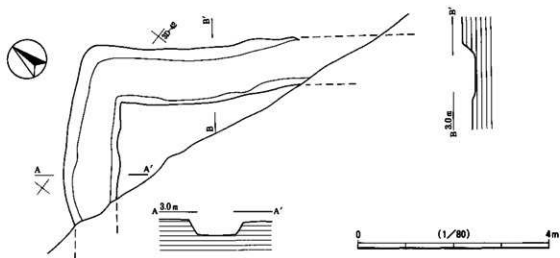
005B



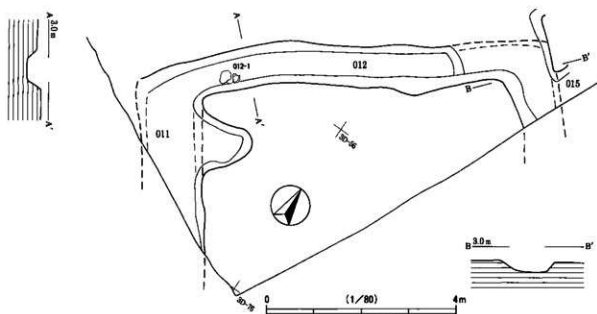
007



第12图 005・005B・007出土遺物



第13図 007

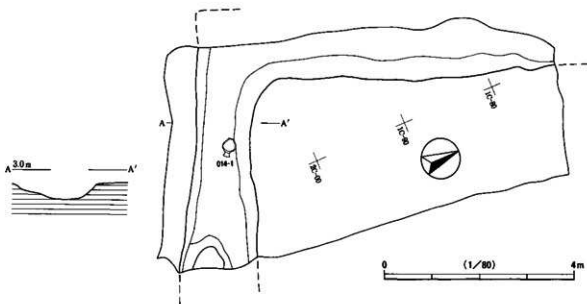


第14図 011・012

ると考えられる。その南西溝の一部が明らかになったと判断され、幅は1.1m～1.5mで、深さは20cm～30cmを測る。断面形は逆台形を示し、底面はほぼ平坦であるが、検出部の南東端部に高まりが残存している。北側で接している溝は、本遺構より浅く、別遺構であることは明らかであるが、部分的であるため詳細は不明である。遺物は弥生土器、土製品が出土している。第17図014-1は横位の状態出土し、ほぼ完形に復元できたが、胴部中位と底部中央部が欠損している。014-2は管状の土錘で、長さ4.8mm、最大径0.9mm、重さ3.6gである。

015(遺物：第17図 図版7)

3D-27・28に位置する溝で、005B・012と接するが、調査区外に伸びるため、詳細の把握は困難である。検出範囲がわずかな部分であることを考慮すると、遺物の出土点数は多いといえる。主体は弥生土器であり、保存状態が不良な壺、甕が存在する。また、3点のミニチュア土器が出土している点が注目される。



第15図 014

016(遺物：第17図 図版10)

竪穴住居跡である003遺構の周辺で検出した、幅0.8m前後で深さ15cmの溝である。004Bが本跡を切断するように入り、また、攪乱が各所にあるため、本来が1条の溝であったか明らかでない。調査開始時には、方形周溝墓の可能性もあると見ていたが、その根拠が乏しいので、性格不明の溝と捉えておきたい。弥生土器、軽石が出土している。土器は少量で、図示に至らない細片である。第17図016-1は、わずかに調整痕が認められる軽石である。

017・018(遺物：第17図)

005と013の間に検出された溝である。017は018から分岐して3mほど伸びるが、端部は不明瞭である。018は両端が005に接続するが、底面は005がやや深い位置になる。

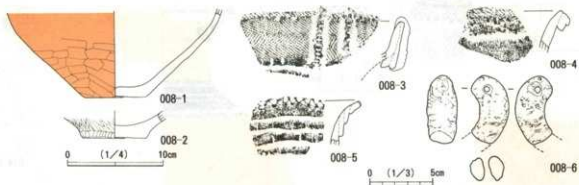
遺物は弥生土器が少量出土している。保存状態の良い資料は存在せず、細片が主体である。第17図017-1は壺の口縁部で、内面に縄文が施されている。ほかに器種としては甕が認められる。

020・040・042(遺構：第18図 図版3 遺物：第19図 図版7・8)

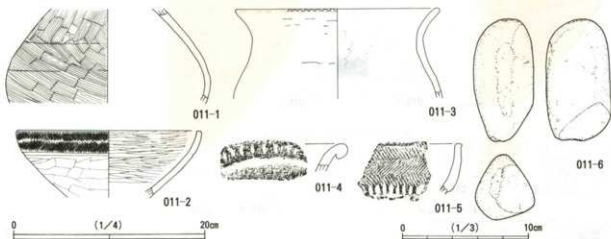
2C区・2D区に位置している。この地区の遺構確認を行っていたところ、覆土が似ている3条の溝を検出した。周辺の攪乱がひどく、単独で伸びる溝の様相を呈しているものの、それぞれを延長して考えると、四角く巡る可能性が高くなった。そこでこの3条の溝は、1基の方形周溝墓を形成するものと解釈し精査を行った。020は攪乱部から北東に7m伸び、直角に曲がって北西に方向を変化させて、042に接続すると推定したが、調査を進めて020と020北の間が切れることが明らかになったほかは、当初の推測を変更する必要はないものと判断される。検出可能であった範囲から、方台部の規模を推定すると、10m×9mになる。

3条の中で最も長く検出できた020は、幅0.8m～0.9m、深さ35cm前後と比較的一定し、北東端部は途中に段を形成して立ち上がっている。断面形は逆台形を示し、覆土は3層に分けられる。1層は砂質の黒色土である。2層は黒灰色土で、3層が暗黄色土である。遺物は第19図上段に示した弥生土器が出土している。出土レベルは2層が主で、保存状態の優れた資料は認められない。

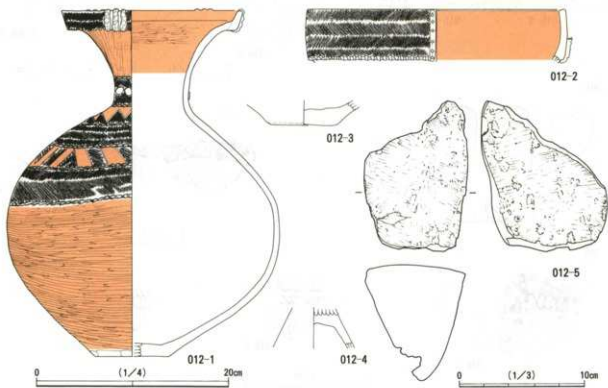
008



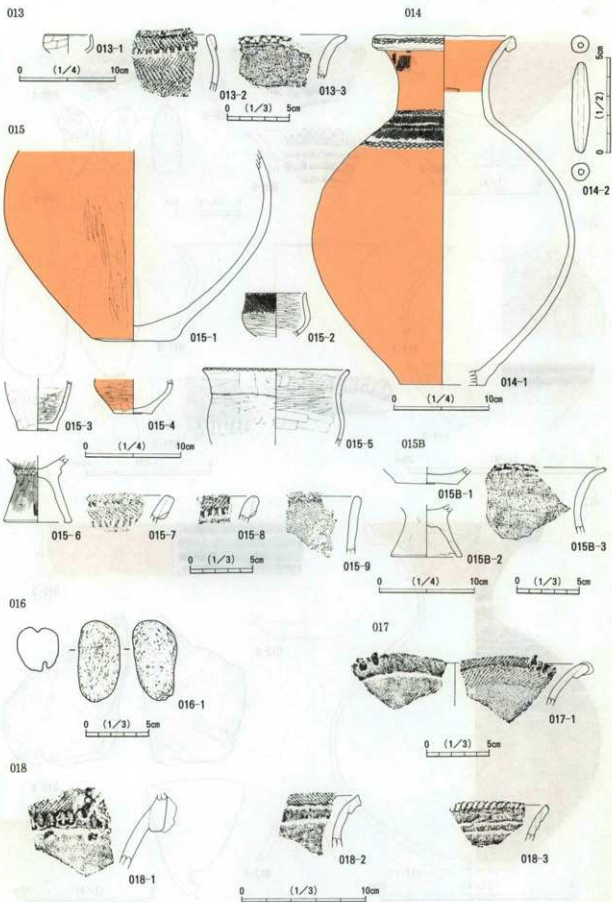
011



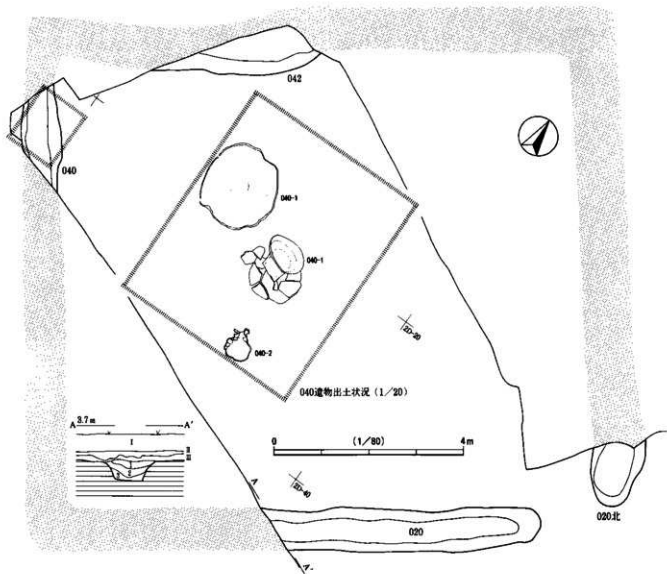
012



第16图 008・011・012出土遺物



第17図 013~018出土遺物



第18図 020・040・042

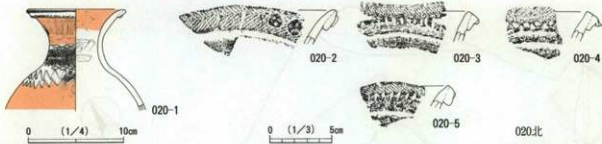
040は南西溝の一部と判断される。攪乱部が存在しなければ、北西方向に延長したところで042に接続すると推測される。ここでは大型の弥生土器の壺と小型の壺が出土している。

直接溝内から出土した遺物ではないが、第26図44のガラス製小玉は注意しておきたい。この出土地点は2C-39内で、ここは方形周溝墓の方台部の中央付近に当たる位置になる。かつて主体部が存在していたことと、そこに納められた副葬品としてのガラス製小玉、という可能性を示す遺物である。

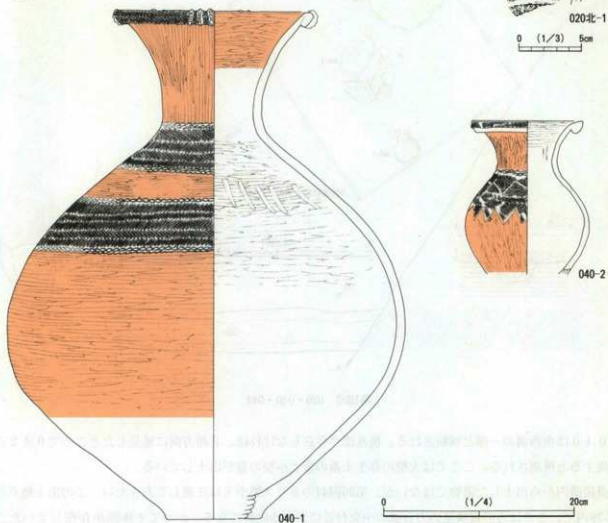
021(遺構:第20図 図版4・5 遺物:第21図 図版7・8・10)

調査区Ⅲの南東隅に鈎の手状の溝が明瞭な形で検出され、方形周溝墓の一部と判断して調査を進めた。北東側の溝は調査区外に含まれ、北西側の溝の続きが調査区Ⅱに検出されていないので、全体の規模は明らかにならないが、北西溝は6.5mについて調査可能であった。幅は1.2m内外で一定し、深さは50cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。覆土は2層に分けられる。1層はしまりのある砂質の黒褐色土である。2層は砂を主にする暗黄褐色土である。遺物は主に2層から出土している。とくに、コーナー付近に土器類が集中して出土している。第21図021-1～6は壺である。1の保存状態が良好であるほかは、

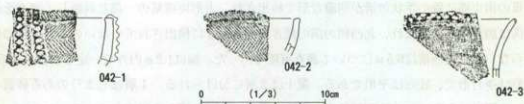
020



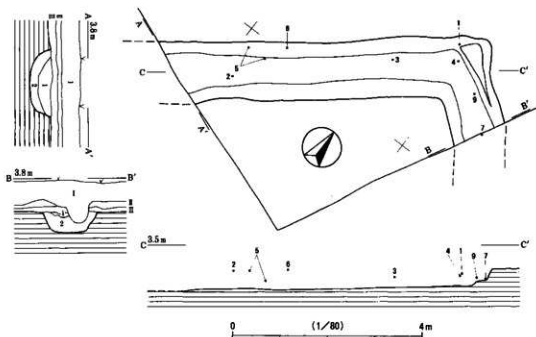
040



042



第19图 020・040・042出土遺物



第20図 021

一部分の遺存にとどまっている。16は打製石斧状石器である。側面と表面に着柄痕跡が認められる。長さ10.3cm、幅4.3cm、厚さ1.2cm、重さ71.56gである。

022(遺構：図版4・5 遺物：第22図 図版8)

調査区Ⅲの南東部に検出した021とほぼ並行する溝である。溝幅は1.8m～2.5mで、場所によって変化している。検出面からの深さは20cm～30cmで、底面は平坦である。遺物は検出範囲の中で2か所に集中して出土している。この溝から出土した土器類は古墳時代後期が主体である。

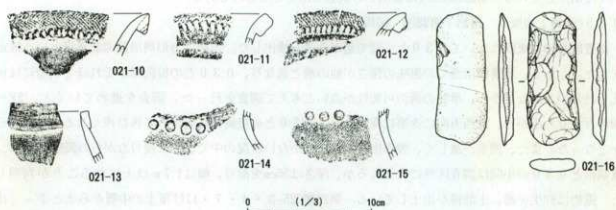
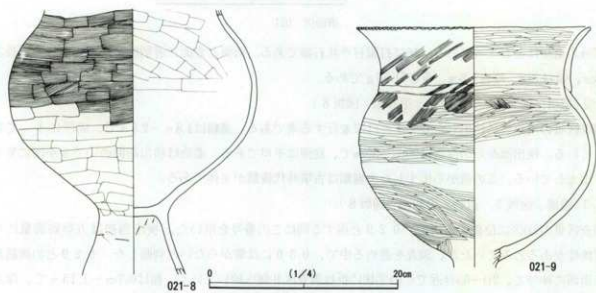
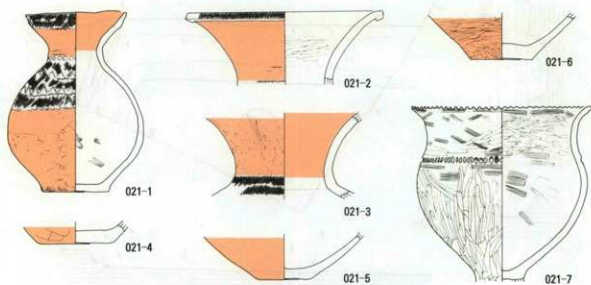
023(遺構：図版5 遺物：第22図 図版8)

調査区Ⅲの2D区に位置する溝で、029と接する間にこの番号を用いた。検出当初は方形周溝墓になる可能性があるともみていたが、調査を進める中で、030には繋がらないと判断した。029との接続部から南西に伸びて、2D-53付近でくの字状に折れ調査区Ⅱ側へ続いていく。幅は0.7m～1.15mで、深さは調査区Ⅱ寄り40cmを測り、029側が10cmほど浅く、段が生じている。遺物は底面からやや浮いたレベルで出土している。第22図023-1は横倒しの状態で出土したものである。

025(遺構：図版5 遺物：第23図 図版8・9)

調査区Ⅲの北東隅において030と一部が繋がる溝を検出した。当初は方形周溝墓の北東溝という推定をした。しかし、遺構検出面での黒土の深さが他の溝と異なり、030との接続部がそれほど明瞭には捉えられないことなどから、単独の溝の可能性が高いと考えて調査を行った。調査を進めていくと、2E-32付近で立ち上がり、北西方向に次第に深くなり、030との接続部に向かって再び浅くなるのが明らかとなった。また、湧水が激しく、汲み出しが追いつかない状況の中で、水に浸りながらの調査になった。東端部と030の間は調査区外に含まれるが、深さは55cmを測り、幅は1.7m以上になることが判明した。遺物は赤土器、土師器が出土している。第23図025-3・4・7・11は覆土の中層からまともに出土し(図版5参照)、5はその下層の出土である。ここから出土した遺物には時代幅が認められ、新しい部類は古墳時代後期に比定できる。

021



第21图 021出土遗物

022



022-1



022-2



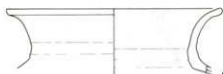
022-3



022-4



022-5



022-6



022-9



022-7



022-10



022-11



022-8

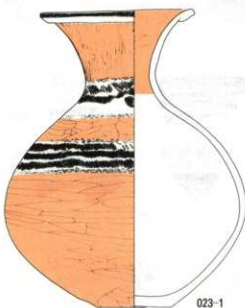


022-12

0 10 20cm (1/4)

0 10cm (1/3)

023



023-1



023-2



023-3

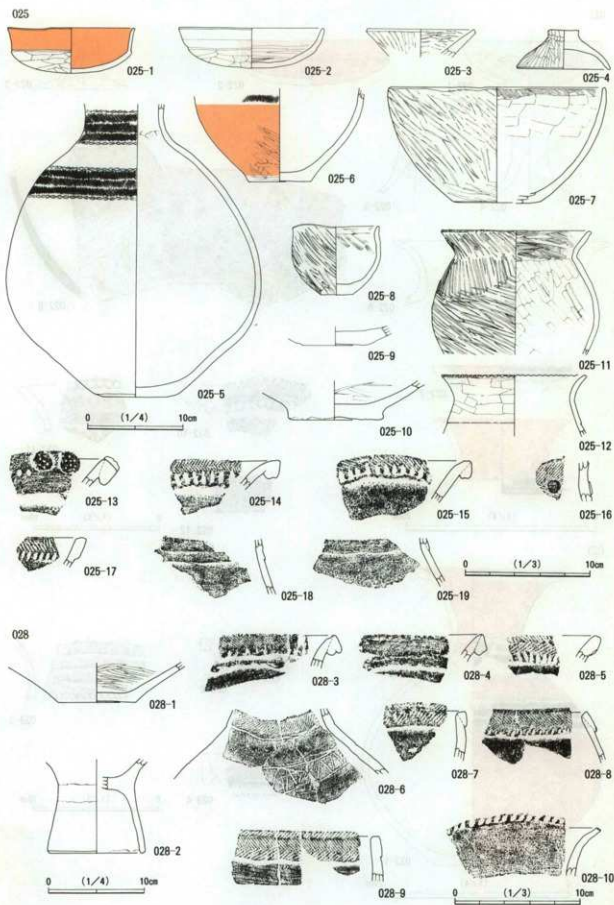


023-4

0 10 20cm (1/4)

0 10cm (1/3)

第22図 022・023出土遺物



第23图 025・028出土遺物

028(遺物:第23図 図版10)

調査区Ⅲの東側に検出した溝である。この溝の存在は022の底面を精査中に明らかになり、021以南にも1条の溝が存在し、同一の遺構として調査を行うことにした。しかし、021によって完全に切られており、1条の溝と断定するには至らない。遺物は弥生土器の壺・甕が認められるが、保存状態は悪い。

029(遺構:図版5 遺物:第24図 図版9)

023・030・025・028の内側を清掃していたところ、黒くはないものの、飛び飛びに列状に色調の異なる部分が存在することが明らかになる。そして色調の異なる部分を調査したところ、1条の溝であることが明らかになった。東側は021と重複し、おそらく調査区外に繋がると考えられ、西側は030を挟んで2D-14で立ち上がる。検出範囲で14.5mの長さがあり、重複部分を除き0.9mから1.4mの幅で、深さは40cm前後である。断面形はU字形を示す。遺物は覆土中から出土している。第24図029-1は西端部から出土し、口縁部を欠くほかは保存状態が良好である。

030・031(遺物:第24図)

030は035と接続し、023とも繋がると考えていたが直接には接続していない。一方、035との間には攪乱が存在するが、延長して推定すると繋がっていたとみられる。また、先述した025と030を同一溝とするには疑問もあるので、030は調査区外の北側に伸びる可能性がある。遺物は弥生土器の壺、鉢、甕が出土しているが、保存状態の良好な資料は含まれていない。

032・033・038(遺物:第24図)

2D-05・06に検出された細い溝である。いずれも幅は0.3m~0.4mで、深さは10cm前後である。排水用か耕作に伴う溝の可能性が考えられるが、明確な性格は不明である。

041(遺物:第24図)

2C-27付近に位置する溝で、わずか4mの範囲を調査したにすぎない。幅は0.65m~0.85m、深さは10cm前後を測り、底面は平坦である。遺物は弥生土器の破片が少量出土したにとどまる。

第2節 遺構外出土遺物

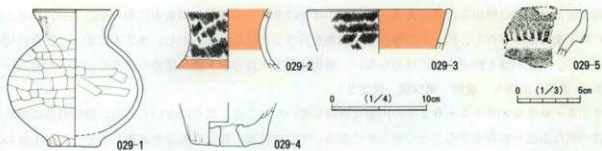
遺構検出作業の途中で出土した遺物や、遺構に伴わない遺物を、第25図から第26図に挙げておきたい。

第25図1は須恵器の杯身、2は土師器の杯で共に古墳時代後期の所産である。6~14は弥生土器である。6は高杯の脚部と考えられる。

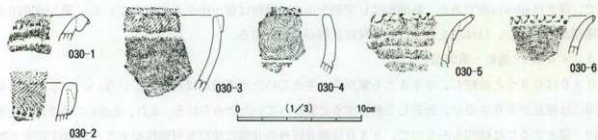
第25図19~第26図43は縄文晩期に比定される土器で、合計67点が出土した。2C-17・21・27・38・39にややまとまってはいるが、全域に散在して出土している。19~21は浮線文を施した浅鉢で、19・20の口縁端部は外に屈曲して終わる。22は壺の肩部の可能性があり、23~43は粗製深鉢である。燃糸文が施文されたものが多く、細密条痕を施すものは少ない。26・27は内折の複合口縁で、28の1点のみが外折の複合口縁を呈する。

44はガラス製小玉である。これは方形周溝墓(020・040・042)の方台部に当たる2C-39から出土している。最大厚4.7mm、最大径5.6mm、孔径2.5mm、重量0.21gである。45・46は管状土錘である。47は垂飾状の土製品で赤彩が施されている。形態はやや厚めの算盤玉状を呈し、厚さ29mm、最大径32mm、重量21.4gを測る。48は板状石製品の欠損品である。各面が丁寧に研磨されているが用途は明らかでない。49は礫石器、50は使用痕跡が残る軽石である。

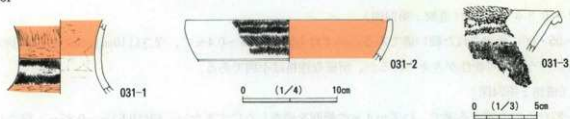
029



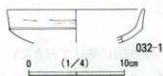
030



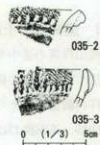
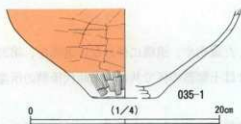
031



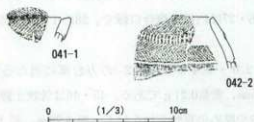
032



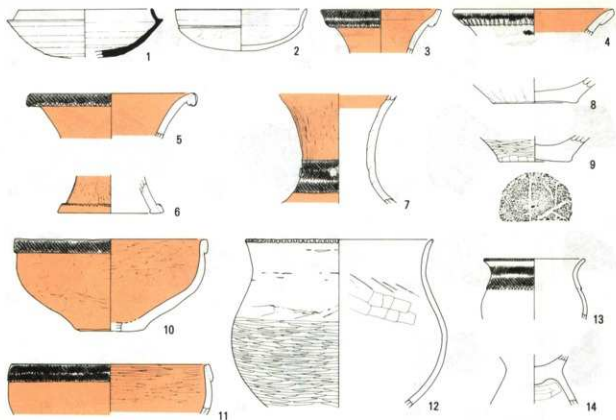
035



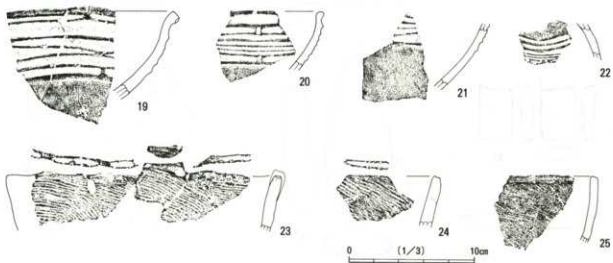
041



第24図 029~032・035・041出土遺物

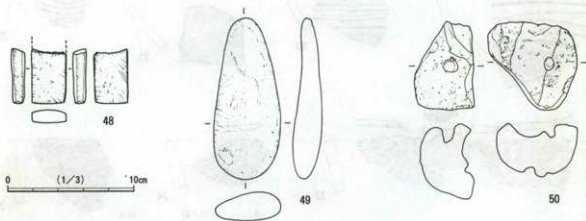
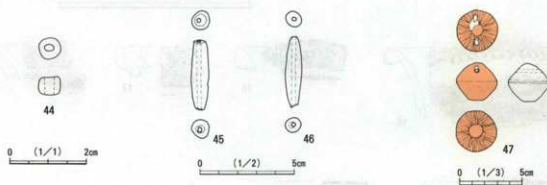
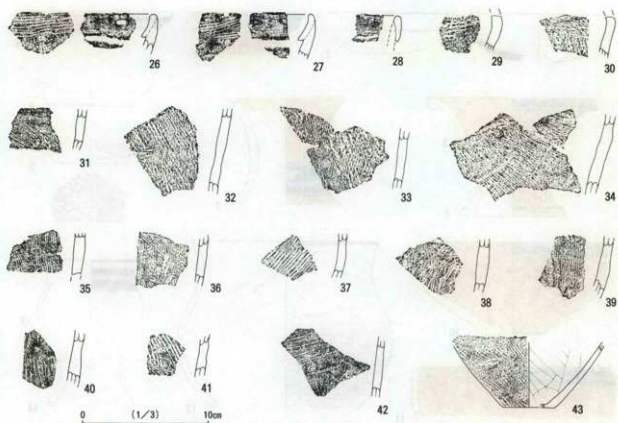


0 (1/4) 20cm



0 (1/3) 10cm

第25圖 遺構外出土遺物(1)



第26圖 遺構外出土遺物(2)

第1表 実測図掲載土器一覽

押図番号	遺物番号	番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胴部最大径	特徴・(遺存状況)・その他
第7図	003	1	壺	12.0	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
		2	壺	—	<20.9>	6.8	23.8	赤彩 (頸部~底部)
		3	壺	15.0	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
		4	壺	—	<8.9>	6.6	—	赤彩 (胴部~底部)
		5	鉢 (7.0)	<4.0>	—	—	—	(口縁部~体部)
		6	壺 (24.0)	<15.8>	—	23.1	—	(口縁部~胴部)
		7	台付壺	<12.2>	—	—	—	(胴部~底部)
第7図	001B	3	壺	—	—	6.2	—	(底部のみ)木妻痕
第7図	006	1	壺	18.8	—	—	—	(口縁部のみ)
		2	壺 (10.8)	—	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
		3	ミニチュア (5.8)	2.1	3.8	—	—	(口縁部一部~底部)
		4	台付壺	—	<7.1>	10.6	—	(脚部のみ)
第9図	024	1	壺 (19.3)	<29.8>	—	—	27.5	赤彩 (底部欠損)
		2	壺	—	—	(8.8)	—	赤彩 (底部のみ)
		3	壺	—	—	6.6	—	赤彩 (底部のみ)
第9図	027	1	鉢	—	—	7.0	—	(底部のみ)
		2	壺	—	—	5.8	—	(底部のみ)
第9図	039	1	壺	14.0	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
		2	壺	—	—	6.6	—	(底部のみ)
第11図	001	1	壺	—	<9.8>	(5.4)	10.8	(口縁部欠損)
		1	壺	13.2	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
		2	ミニチュア	—	<2.5>	(3.0)	—	赤彩 (口縁部欠損) 壺形
		3	壺	22.0	<10.7>	—	<22.8>	(口縁部~胴部中位)
		4	壺	23.0	—	—	—	(口縁部のみ)
第11図	005	1	壺	—	<7.9>	—	—	赤彩 (頸部~胴部)
		2	壺	—	<9.3>	—	—	赤彩 (頸部~胴部)
		3	壺	—	<10.6>	—	<30.0>	赤彩 (胴部上半)
		4	壺	—	<7.1>	(7.8)	—	赤彩 (胴部下半~底部)
		5	壺	—	<9.0>	10.0	<24.0>	赤彩 (胴部下半~底部)
第12図	005B	1	壺	16.8	36.6	8.0	31.0	赤彩 (胴部一部欠損)
		2	壺	—	<19.8>	7.2	20.2	赤彩 (口縁部欠損)
		3	ミニチュア	—	<3.4>	(3.4)	—	(脚部のみ) 高杯形
		4	壺 (20.8)	<8.1>	—	—	—	(口縁部のみ)
		5	壺 (22.2)	—	—	—	—	(口縁部のみ)
第12図	007	1	壺	—	—	(6.8)	—	(底部のみ)
		2	壺	—	—	6.2	—	(底部のみ)
		3	壺	19.8	<16.6>	—	19.8	(底部欠損)
第16図	008	1	壺	—	<9.1>	6.2	<22.6>	赤彩 (胴部中位~底部)
		2	壺	—	—	6.6	—	(底部のみ)
第16図	011	1	壺	—	<9.9>	—	21.5	(胴部上半)
		2	鉢	19.2	<7.0>	—	—	(底部欠損)
		3	壺	21.6	<9.4>	—	—	(口縁部~胴部上半)
第16図	012	1	壺	18.6	35.7	7.6	28.6	赤彩 (胴部一部欠損)
		2	高杯 (27.0)	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)	
		3	壺	—	—	7.2	—	(底部のみ)
		4	台付壺	—	—	—	—	(壺・台接合部のみ)
第17図	013	1	ミニチュア (5.0)	<2.1>	—	—	(底部欠損) 無頸壺形	
第17図	014	1	壺	14.2	36.5	9.0	27.8	赤彩 (胴・底部一部欠損)
第17図	015	1	壺	—	<19.8>	(8.4)	(28.1)	赤彩 (胴部~底部)
		2	無頸壺 (6.4)	<4.5>	—	—	—	(底部欠損)
		3	ミニチュア	—	<5.4>	(4.0)	—	(胴部~底部) 壺形
		4	ミニチュア	—	<3.5>	3.8	8.2	赤彩 (胴部~底部) 壺形
		5	壺	15.6	<7.9>	—	—	(口縁部~胴部上半)
		6	高杯	—	—	7.2	—	(脚部のみ)
第17図	015B	1	壺	—	—	6.6	—	(底部のみ)
		2	高杯	—	—	(7.4)	—	(脚部のみ)

() 付きは復元値 < > 付きは現存値

第1表 実測岡周載土器一覧

押図番号	遺構番号	番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胴部最大径	特徴・(遺存状況)・その他
第19図	0 2 0	1	壺	10.4	<10.7>	—	—	赤彩 (口縁部・胴部上半)
第19図	0 4 0	1	壺	20.4	(41.0)	10.0	42.0	赤彩 (胴部下半一部欠損)
	"	2	壺	11.6	<15.9>	—	13.1	赤彩 (底部欠損)
第21図	0 2 1	1	壺	10.5	18.9	(7.0)	14.3	赤彩 (胴部・底部1/2欠損)
	"	2	壺	20.8	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
	"	3	壺	—	—	—	—	赤彩 (頸部のみ)
	"	4	壺	—	—	—	7.8	赤彩 (底部のみ)
	"	5	壺	—	—	5.6	—	赤彩 (底部のみ)
	"	6	壺	—	—	6.4	—	赤彩 (底部のみ)
	"	7	台付甕	19.0	<18.1>	—	17.9	(台部欠損)
	"	8	台付甕	—	<27.6>	—	26.1	(口縁部・台端部欠損)
	"	9	台付甕	24.6	<24.9>	—	24.9	(台部欠損)
第22図	0 2 2	1	土師杯	(14.8)	<4.7>	丸底	—	黒彩 (底部欠損)
	"	2	" 杯	(15.4)	(4.8)	丸底	—	(1/2遺存)
	"	3	" 高杯	—	<5.1>	9.2	—	(脚部のみ)
	"	4	" 高杯	—	<6.1>	—	—	(脚柱部のみ)
	"	5	" 高杯	—	<4.2>	—	—	(脚柱部のみ)
	"	6	" 甕	22.6	—	—	—	(口縁部のみ)
	"	7	壺	14.8	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
	"	8	壺	—	—	—	—	赤彩 (頸部のみ)
第22図	0 2 3	1	壺	16.0	30.8	7.6	25.4	赤彩 (胴部一部欠損)
第23図	0 2 5	1	土師杯	(13.3)	<4.7>	丸底	—	赤彩 (1/3遺存)
	"	2	" 杯	15.4	4.2	丸底	—	(ほぼ完形)
	"	3	器台?	11.6	—	—	—	(口縁部のみ)
	"	4	蓋?	9.6	4.1	—	—	(完形)
	"	5	壺	—	<30.5>	8.4	26.9	赤彩 (口縁部欠損)
	"	6	壺	—	<9.7>	6.4	<18.2>	(胴部下半~底部)
	"	7	甕	—	<12.1>	9.2	<23.2>	(胴部下半~底部)
	"	8	鉢	9.2	7.0	3.4	9.5	(3/4遺存)
	"	9	壺	—	—	7.0	—	(底部のみ)
	"	10	壺	—	—	9.8	—	(底部のみ)
	"	11	甕	15.8	<12.9>	—	17.7	(口縁部~胴部1/2遺存)
	"	12	甕	15.2	<6.4>	—	—	(口縁部~頸部)
第23図	0 2 8	1	壺	—	—	8.0	—	(底部のみ)
	"	2	台付甕	—	<9.8>	10.2	—	(台部のみ)
第24図	0 2 9	1	壺	(8.8)	14.4	(5.4)	14.3	(口縁部一部遺存)
	"	2	壺	—	—	—	—	赤彩 (頸部のみ)
	"	3	壺	(15.4)	<4.2>	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
	"	4	不明	—	—	(7.6)	—	(底部のみ)
第24図	0 3 1	1	壺	—	—	—	—	赤彩 (頸部のみ)
	"	2	鉢	21.8	<4.1>	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
第24図	0 3 2	1	土師杯	14.4	<3.5>	(丸底)	—	(口縁部~体部上半)
第24図	0 3 5	1	壺	—	<9.2>	7.2	—	赤彩 (胴部下半~底部)
第25図	遺構外	1	須恵杯	14.0	(5.2)	丸底	—	(底部欠損)
	"	2	土師杯	13.8	4.0	丸底	—	(口縁部1/2欠損)
	"	3	壺	12.8	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
	"	4	壺	16.6	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
	"	5	壺	17.2	—	—	—	赤彩 (口縁部のみ)
	"	6	高杯	—	<3.8>	(11.2)	—	赤彩 (脚部のみ)
	"	7	壺	—	—	—	—	赤彩 (頸部のみ)
	"	8	壺	—	—	6.6	—	(底部のみ)
	"	9	壺	—	—	5.8	—	(底部のみ)
	"	10	鉢	20.2	9.6	7.0	19.8	赤彩 (1/2遺存)
	"	11	鉢	(20.8)	<5.3>	—	—	赤彩 (口縁部~体部上半)
	"	12	甕	19.8	<17.5>	—	22.7	(底部欠損)
	"	13	甕	10.6	<6.3>	—	11.2	(口縁部~胴部上半)
	"	14	台付甕	—	—	—	—	(甕・台接合部のみ)

() 付きは復元値

< > 付きは現存値

第3章 まとめ

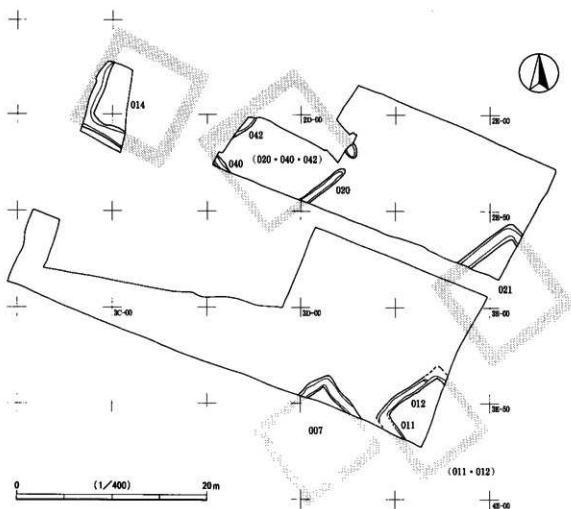
小櫃川下流域は、周知されている遺跡、あるいは調査例において、今日まで全くといえるほど乏しい状況にあった。今回の水深遺跡の発掘では、調査面積に比して、多くの遺構・遺物が検出された。これは本地域にとっては新鮮であり、また、周辺を捉え直す材料の一つになる成果と考えられる。

検出した遺構は、竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構2基、方形周溝墓5基、土坑9基と多数の溝である。003が弥生時代後期に比定できる竪穴住居跡で、その平面形は楕円形を示すものであるが、炉や柱穴は明確に捉えられなかった。また、調査区外に含まれる部分が多く、全容の把握は不可能であったが、弥生時代後期の竪穴状遺構2基の存在を明らかにした。土坑は024から完形の壺が出土するなど、それぞれから遺物が出土した。そして方形周溝墓は第27図のような5基の存在を推定した。

本発掘調査では様々な方向に伸びる多くの溝を検出している。調査範囲の中で全体が判明した溝は少数で、大部分が調査区外に伸びたり途中で攪乱が入り、部分的な調査にとどまっている。その多数の溝の中の5か所が、弥生時代後期の方形周溝墓の溝の一部になると判断した。それらの中の007・014・(020・040・042)・021の4基に共通する特徴は、検出面において比較的溝幅が一定して、そして直線的に伸びる落ち込みが確認できたことと、遺構の断面形が逆台形を呈し、掘り方がしっかりしていることである。また、残る1基(011・012)については、調査時点では異なる2条の溝として扱ったが、空中写真の検討などから同一遺構としての蓋然性を高め、方形周溝墓との判断を下した。いずれも全体が明らかにならない状況で検出されたが、(020・040・042)の方台部の規模は9m以上と推定され、他の4基も6m×6m以上の規模と考えられる。また、方台部の方向は、007・(011・012)・(020・040・042)・021の4基がN-38°-W前後を指し、014の1基のみがN-60°-Wを向いている。方形周溝墓間の切り合いが認められないことや、4基の方台部の方向の近似性は、本地域における計画的造墓活動を示しているだろう。

溝は022が古墳時代後期と考えられ、また、025もその時期になるかもしれないが、大部分が弥生時代後期に比定できるものである。しかし、検出が部分的であるため不明な点も多く、その構築過程や目的については保留しておくのが妥当であろう。

遺物は弥生土器を主体に、縄文土器、土師器、須恵器の土器類と、土製品、石器、石製品、ガラス玉が出土している。弥生土器は壺、甕、鉢、高杯の器種が認められる。その中で保存状態が良好で、数量でも他の器種を上回って出土しているのは壺である。ほぼ全容が捉えられる壺としては、003-2、024-1、005B-1、012-1、014-1、040-1、040-2、021-1、023-1、029-1、025-5が挙げられる。これらの壺は器形から大略次のような3分類が可能と思われる。1類は、胴部球形で口縁部が緩やかに開きながら立ち上がり、折返し口縁を呈すもので、003-2、040-1、040-2、023-1が含まれる。2類は、胴部が球形で、口縁部は開いて内側に段を設ける受口状のものも認められ、口縁部の幅がやや広くなるもので、024-1、005B-1、012-1が該当する。3類は、胴部が球形を呈し、肩部と頸部が明らかで口縁部が開くもので、014-1、021-1、025-5、029-1が相当する。以上の器形上の特徴は、時間的前後関係を示しており、1類から2類そして3類へと経過すると考えられる。この編年の位置付けを、(財)君津都市文化財センターが行った「君津地方における弥生後期～古墳前期の諸様相」¹⁾の検討に従えば、1類はⅢ期の後期中葉、



第27図 方形周溝墓の分布

2類はⅣ期の後期後葉、3類はⅤ期の後期末葉にそれぞれ対比できる。したがって、検出した大部分の遺構は、弥生時代後期後半に営まれたといえる。

弥生土器以外に注目しておきたい遺物に、縄文時代晩期の土器がある。器種としては精製の浅鉢、壺、粗製の深鉢が存在する。浅鉢は多条の浮線によるレンズ状モチーフや、二分歧ハンガー状モチーフを文様単位としている。近年、本県では市原市武士遺跡¹⁾等で、まとまった晩期の資料が公表されているが、本資料の位置付けについては、慎重を期す必要がある。一応現在の認識として、四街道市御山遺跡²⁾における、御山(古)段階の様相に対応するものと考えておきたい。

以上簡単ではあるが、調査成果をまとめてみた。本地域における調査例は、これまで高砂遺跡が唯一であったので、今回の成果の第一は、小櫃川下流域の自然堤防上にも、広く遺跡が展開することを如実に示した点にある。これを契機に、さらに周辺の状況が解明されることを期待したいと思う。

注1 (財)君津都市文化財センター 1996 『研究紀要Ⅶ-共同研究「君津地方における弥生後期～古墳前期の諸様相」-』

2 (財)千葉県文化財センター 1996 『市原市武士遺跡1 -福増浄水場埋蔵文化財調査報告書-』

3 (財)千葉県文化財センター 1994 『四街道市御山遺跡(1)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-』

1. 調査前の遺跡近景



2. 平成8年度調査状況



3. 平成9年度調査状況





1.003全景



2.003遺物出土状況



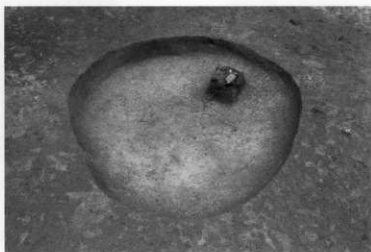
3.002遺物出土状況



4.024遺物出土状況



5.026全景



6.027全景



7.034全景



8.036全景



1. 005B遺物出土狀況



2. 011・012全景



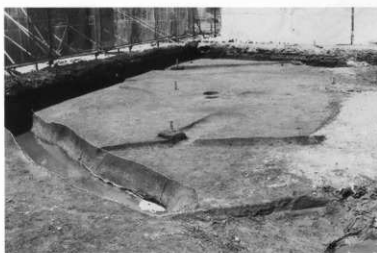
3. 012遺物出土狀況



4. 014全景



5. 014遺物出土狀況



6. 020・040・041全景



7. 020土層断面



8. 040遺物出土狀況



1. 021全景



2. 021遺物出土状況 (1)



3. 022全景



1. 021遺物出土状況 (2)



2. 021遺物出土状況 (3)



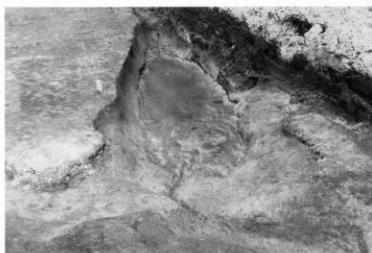
3. 022遺物出土状況



4. 022土層断面



5. 023遺物出土状況



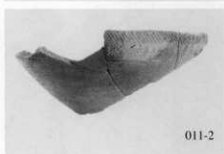
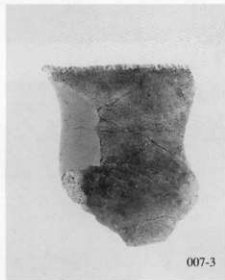
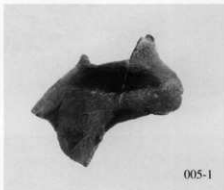
6. 025全景



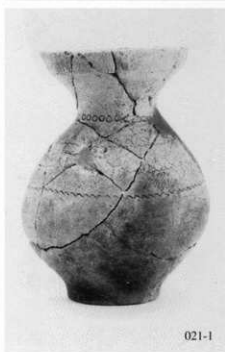
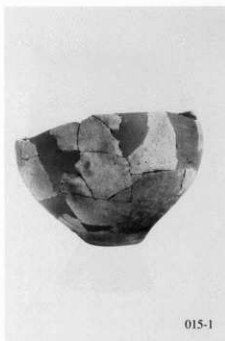
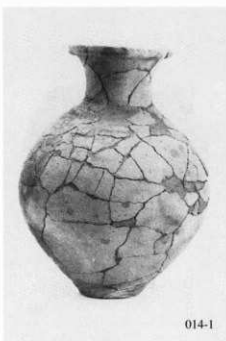
7. 025遺物出土状況



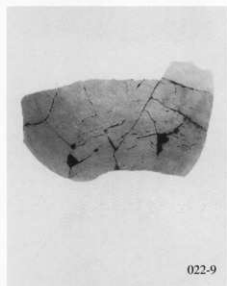
8. 029全景



出土土器 (1)



出土土器 (2)



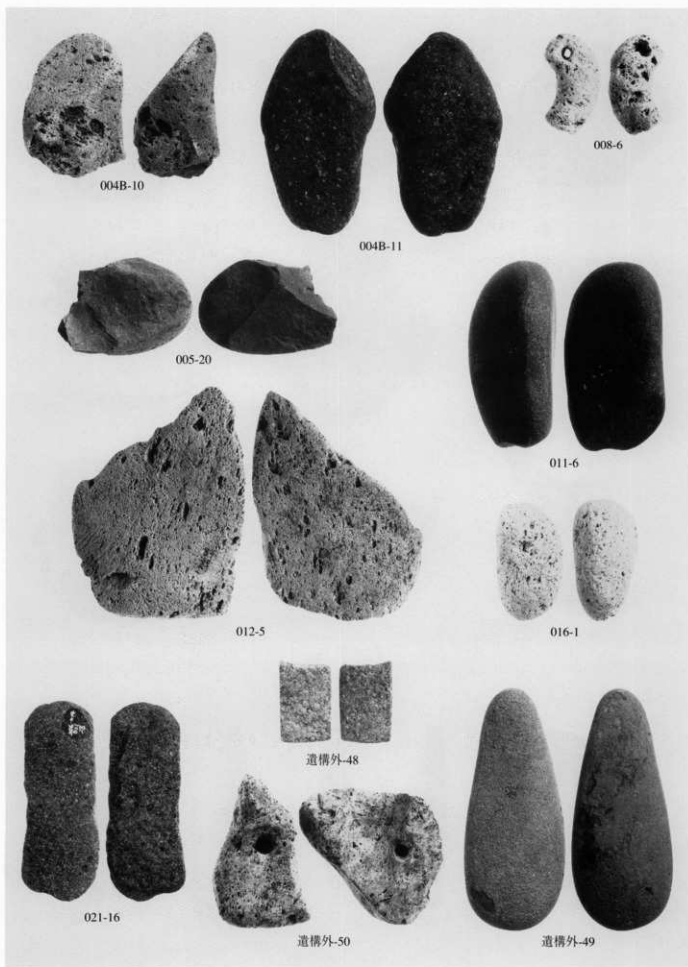
出土土器 (3)



出土土器 (4)



土製品・ガラス製小玉



報告書抄録

ふりがな	きさらづしみずぶかいせき							
書名	木更津市水深遺跡							
副書名	岩根待機宿舍埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第347集							
編著者名	小林清隆							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL. 043-422-8811							
発行年月日	西暦1998年12月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° , ′	東経 ° , ′	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
水深	千葉県木更津市 岩根2-2155-9	12206	014	35° 24′ 29″	139° 56′ 02″	19970104～ 19970227 19970401～ 19970530	2,086	岩根待機 宿舍建設 工事に伴 う埋蔵文 化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
水深		縄文時代 弥生時代	竪穴住居跡 竪穴状遺構 方形周溝墓 土坑 9基 溝状遺構	1軒 2基 5基	縄文土器(晩期) 弥生土器(後期) 土製品 ガラス製小玉 石器 軽石 土師器(後期) 須恵器	小櫃川下流域左岸の 標高3.3mの自然堤 防上に立地する		
		古墳時代	溝状遺構					

千葉県文化財センター調査報告第347集

木更津市水深遺跡
—岩根待機宿舍埋藏文化財調査報告書—

平成10年12月31日発行

編 集	財団法人 千葉県文化財センター
発 行	千葉県警察本部 千葉県千葉市中央区市場町1-2
	財団法人 千葉県文化財センター 千葉県四街道市鹿渡809-2
印 刷	大和美術印刷株式会社 千葉県木更津市潮浜2-1-10
